高柳芳夫

ベルリンの夜に逃れて

ベルリンの夜に逃れて
高柳芳夫
© Yoshio Takayanagi 1986

昭和61年10月15日第1刷発行

発行者——野間惟道
発行所——株式会社 講談社
東京都文京区音羽2-12-21 〒112
電話 東京(03)945-1111(大代表)
Printed in Japan

講談社文庫
定価420円

デザイン——菊地信義
製版——大日本印刷株式会社
印刷——大日本印刷株式会社
製本——株式会社国宝社

落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部宛にお送りください。
送料は小社負担にてお取替えします。 (庫一)

ISBN4-06-183848-2 (0)

129844

日文 701672078

講談社文庫

ベルリンの夜に逃れて

高柳芳夫

講談社

目次

第一章　クーアヒュルステンダム通りの女　七
第二章　『壁』の家　一六
第三章　消えた医学者　三〇
第四章　防衛駐在官という名のスパイ　四九
第五章　動く地下室　六六
第六章　病める権力者　八一
第七章　水に浮ぶ死体　一〇三
第八章　影たちの軌跡　一一一
第九章　苦悩する良心　一三一
第十章　いのちは国境を越えて　一三〇
第十一章　暗黒の牢獄　一四六
第十二章　権力者たちの推理　一六二

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

第十三章　アレキサンダー広場の女　一七七
第十四章　男爵令嬢　一八八
第十五章　屈辱の訊問　二〇七
第十六章　嵐のまえに　二一七
第十七章　たったひとりの反乱　二二六
第十八章　医学者の再会　二三七
第十九章　古城の嵐　二四七
第二十章　KGBの怒り　二六七
第二十一章　脱出の論理　二七三
第二十二章　夜に逃れて　二八〇
終章　クレムリンの陰謀　二九八
解説　郷原宏　三〇八

ベルリンの夜に逃れて

第一章　クーアヒュルステンダム通りの女

1

夕闇のなかに、女の白い顔が動いた。

女は、ちらとこちらをふり返ったようである。

「お嬢(フロイライン)さん。おひまでしたら、ワインでも飲みませんか。それともお急ぎなら、家へお送りしますよ」

平野和夫は、歩道すれすれにベンツを徐行させながら、開いた助手席の窓越しに女に声をかけた。割合い流暢なドイツ語だが、声が少しふるえた。

女はドイツ人にしては、背は小柄な方だが、全体にほっそりした躰つきで、脚がすらっと伸びている。白のコスチュームの胴がきゅっと締まり、そこから丸く張った腰へかけての曲線が、なんともいえぬ色気を発散している。つばの広い白い帽子をななめにかぶっている。その帽子の下から、うしろでまとめた金髪がはみ出している。色白の顔は、上品に整っている。ファッション雑誌のモデルのような女であった。

「まだ宵の口ですよ。そんなに急ぐことはないでしょう。一、二時間つき合って下さっても、い

いじゃないですか」

平野は勇気を出して、いっぱしのプレイボーイのような口を利いた。

女は、彼の言葉が耳に入らぬように、黙って歩いて行く。だが、ときどき歩道に並ぶショーウインドウや歩道のほぼ中央に一定間隔で立つ大きなショーケースに眼を遣り、ちょっと立ち止まって、なかを覗いたりする。それが、平野には、先刻から思わせぶりな態度に思えて仕方なかった。

〈あの女、あんな風にして、それとなくおれの品定めをしているんだな〉

それは、こうして女を拾った経験のある平野の直観であった。

爽やかな風に街路樹の葉の鳴る五月一日の晩である。

西ベルリンの『シャンゼリゼー』ともいわれる市一番の繁華街クーアヒュルステンダム通りであった。

女を尾けるベンツの行く手には、塔の先端が崩れたままの教会が、照明を受けて星空に浮き上がっていた。『皇帝ヴィルヘルム記念教会』である。今次大戦で破壊されたのを、戦争の惨禍を忘れぬためにそのまま残した西ベルリンの象徴である。

「どうですか、お嬢さん。ぼくは日本人留学生なんです。ピアニストですよ。お嬢さんにふさわしい店を知ってるんですがね」

クーアヒュルステンダム通りは、西ベルリンの中心街を東西に伸びる長さ約二キロの大通りで、道幅は三十数メートル、車道は六車線で、中央分離帯に、両側から自動車を乗り入れられる

幅広い無料駐車場がある。ここでは、車道での駐車は禁止されているし、路肩に駐車する自動車や自転車など邪魔になるものはないから、自動車を歩道に沿って徐行させながら通行人に話しかけるのは簡単である。

「お嬢さん。そんなにすまして、まさか唖じゃないんでしょうね」

平野は、思い切って言った。こんな言葉も、ドイツ語だから出る。

女は、ちらっとふり向いて、平野を見た。今度は間違いなかった。

〈これは、脈があるな〉

平野は、思った。

それからしばらく、女は、顔を真直ぐ前に向けて歩きつづけたが、不意に右手に折れた。平野は、右手にハンドルを切った。

そこは、事務所らしいビルの並ぶ薄暗い通りであった。

〈もう間違いない〉

ハンドルを握る手が汗ばむのを、平野は感じた。

2

平野が、この女を見かけたのは、偶然であった。

クーアヒュルステンダム通りの『レストラン・アレキサンダー』で夕食をとっていたとき、大きなガラス窓越しに、歩道を歩いて行く彼女にふと気づいたのである。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

そのとき、平野は、レストランのなかから通りを往来する人の群れにぼんやり眼を遣っていた。

クーアヒュルステンダム通りには、人と自動車の往来が多かった。散歩を楽しむ男女や買物帰りの家族づれが往来していた。外国人の観光客らしい一団も通った。

そんな人群れのなかで、女の白い衣裳と帽子はひときわ目立った。

女は、レストランの方に顔を向けた。

女と平野の視線が合った。女は、ちょっと口元に微笑を見せたようである。だが、それは、すぐ、平野の錯覚と気づいた。夕暮れのなかの白い顔が、点滅するネオンやショーウインドウの照明を浴びて、微笑したように見えたのであろう。

まさか自分を見て微笑するはずはないと思ったが、しかし、彼女の陰影の深い顔は、瞼に残った。

年齢は二十三、四であろう。少し化粧は濃いが、夜の商売の女に見られる崩れた感じはまったくなかった。

むしろ、身分のある家庭の令嬢が、おしのびで遊びに出たといった上品な雰囲気が、その女にはあった。

〈さすがベルリンだな、いい女がいる〉

平野は、思った。

だが、ほどなく、彼は、おや、と思った。その女が、またレストランの前を通ったからであ

る。レストランの前までぶらぶら歩いて来て、平野のテーブルから七、八メートル離れたショーケースの前に立ち止まり、陳列された宝石類を眺めているのであった。

平野の胸は、高鳴った。

平野は、急いで勘定を払い、外へ出て、レストラン前の駐車場に停めておいたベンツに乗って女のあとを追ったのである。

3

女は、薄暗い通りをつき当り、左に折れた。

角に店を閉めたガソリンスタンドがあり、その先は、空地のつづく暗い道であった。人通りはなかった。

女を追って、ハンドルを左に切った。

女は、明りの消えたガソリンスタンドの隅に立っていた。女の白い帽子とコスチュームが、街灯の明りを受けて浮き立って見えていた。彼を待っているのである。

平野は、自動車を停めた。

急いで運転席から降り、女の前に立った。

「あなた、日本人ね」

発音のきれいなドイツ語であった。

「そ、そうです」

まともに女に見つめられて、平野は、どぎまぎして答えた。
「あなた留学生？」
「そうです。芸術大学の学生です。ぼくはピアニストなんです」
女は、彼の足先から頭まで調べるように視線を這わせた。
「そうね。そういえば、芸術家らしい雰囲気があるわ。わたしも、音楽は好きよ」
平野は、もう大丈夫と思った。
「まだ、八時です。お食事がまだなら……」
平野は、おずおずと誘いの言葉を繰り返した。懇願するような口調であった。女の美しさが、彼からイニシアチブを奪っていた。
「そうねえ、一時間くらいなら、つき合ってもいいわ」
女は、言った。平野を見て、悪い人間ではないと判断したのであろう。
平野は、助手席のドアを開けて、女をベンツに乗せた。
ネオンの街が、窓外に流れた。
心臓が高鳴り、顔が火照(ほて)って、外界の音が耳から遠のくような感じがした。こんなにうまく行くとは、予想もしなかった。
平野が、こんなやり方で女を誘う方法を知ったのは、西ベルリンへ来て間もない一年前であった。
そのころ、彼は、友人も恋人もいない淋しさを、暇があれば繁華街に出てまぎらせていた。

ある春の宵であった。

クーアヒュルステンダム大通りのレストランに座って、眼の前の歩道をぼんやり眺めていた平野は、ふとあることに気づいたのである。

ネオンや照明の美しい歩道をゆっくり往来する人群れのなかに、ついと近づいて立ち止まり、短い会話を交して別れて行く人たちがいる。それは、動き回っていた一匹の蟻が、仲間に会って触角をさすり合い、また離れて行くのに似ていた。

注意していると、そんな光景が、あちこちで頻繁に見られた。それも、話し合うのは、男と女にきまっていた。そして、ほとんどの女が、若く美しかった。

平野は、はじめ、彼らは道やレストランなどの場所を訊いたり答えたりしているのだと思った。だが、西ベルリンほど道路が整然として、住所や番地のわかりやすい都会は、ヨーロッパでも他にあまりないのである。

平野は、芸術大学でそのころ親しくなったドイツ人の友人に訊いてみた。

「あれは、男が、女にモーションをかけているのさ」

ドイツ人は、笑いながら答えた。

「しかし、まだ宵の口だぜ。それに、女は、どう見ても素人としか見えない令嬢や若夫人といった感じの美人ばかりだ」

「令嬢だって人妻だって、かまうものか。この西ベルリンではね。日暮れて……いや、日が暮れなくたって……ひとり歩きしている女には、話しかけてみるもんなんだよ。意外に成功すること

があるんだ。それに……女の方だって、男の誘いを待っているのさ」
「そうかな。とても信じられないな。どの女も、近づきがたい感じで……」
「女は、表面は固い殻をつけているが、殻さえ破れば、なか味はぐちゃぐちゃさ。女をモノにするのは、押しの一手だ。押して押して、押しまくるんだね。遠慮することはない。君もやってみるといい。駄目で、もともとじゃないか。自動車があれば……それも、高級車の方がいい……歩道に沿って徐行しながら女に声をかけてみる方法もある。この方が成功する率は高い。こちらが感じのいい青年で、しかも金があると踏めば、誘いに乗ってくる女は意外に多いもんだよ」
それから、平野のアバンチュールが始まった。
どう見ても商売女でない、身なりのきちんとした女性はとりつく島もないような感じで、はじめ勇気が要ったが、ある晩、通行人のまばらな通りで、おそるおそる声をかけた令嬢風の娘を思いがけず手に入れてから、彼の自信は急速に深まった。
平野は、早速ベンツを買った。父親が製薬会社の社長なので、資金は充分であった。
堂々としたベンツと育ちのよさを窺がわせる東洋人の風貌が好感を与えるのだろうか、その後、平野は、素人の娘や人妻を誘ってなん度も成功している。西ベルリンへ来てから遊んだ素人のドイツ女性は、すでに十数人を数える。
しかし、今晩のような経験は、はじめてであった。
平野は、ネオンの輝く通りに自動車を走らせながら、女の横顔を盗み見た。
〈ちょっと、フランス女優のカトリーヌ・ドヌーブのような女だな〉

西ベルリンへ来てこれほどの美人に会ったのは、はじめてであった。
平野は、夢見心地でハンドルを握りしめていた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton